



女性医師支援センター便り

～「総論」から「各論」へ、さらなる実績の向上へ～

宮城県医師会常任理事

宮城県女性医師支援センター副センター長

高橋 克子

今年も残り少なくなり、この1年を振り返る時期となりました。

「論議」には、「総論」と「各論」があります。「総論」は全体を総括した論と広辞苑にはありません。平成20年から女性医師支援の事業を行い、平成22年に宮城県女性医師支援センターを設立して以来、毎年支援セミナーや、学生・研修医向けのセミナーなどを行い、諸問題を提起し新しい情報を取り入れ、懇親会では情報交換し相談にも乗りました。もちろんホームページも更新しながら広報宣伝に努めました。女性医師支援は男女共同参画推進に進み、全体の医師の勤務環境の改善へと変化しております。しかし、この5年間を振り返るとどうも「総論」の段階にとどまっているようにも思われます。「論議」を進めるためには、「各論」に入り実行し、実績をあげなければなりません。

一昨年度末から、仙台市以外の基幹病院（大崎市民病院、みやぎ県南中核病院、石巻赤十字病院）に出かけ日医及び宮城県女性医師支援センターの事業の報告や、それぞれの病院での取り組んでいる様子や問題点、要望点などを議論しました。院長、女性医師のみならず男性医師、看護師、事務員多くの職員があつまり、熱心な討論ができ、大変な収穫でした。

そこで、今年には仙台市内の病院にも出向くことにしました。10月29日（火）午後6時半から東北労災病院での会議では、佐藤克巳院長は大変協力的で、女性医師が働きやすい病院を目指しておられるとご挨拶されました。院長と女性医師の懇談会を定期的に関き、さまざまな要望を解決できるよう努力していると話されました。窓口を大腸肛門科生澤史江先生、呼吸器外科保坂智子先生（両先生とも宮城県女性医師支援センター委員）にして、これからも女性医師のさまざまな問題点などの相談に当たることが決まりました。生澤史江先生が行ったアンケート調査のまとめとして、①当直明けの午後休みは病院としては進めているが実際はとられていなかった。②女性医師専用仮眠室は女性医師全員が希望している。③卒後10年目までの内科系男性医師の女性医師支援への関心があまりにないことが分かった。④女性医師への上司の理解がなく驚くような発言もあった。⑤一人主治医制は病院の方針として廃止し、複数主治医制度を推進してほしい。などがあげられ、一つ一つ解決できるよう病院全体として取り組むことに決意が表明されました。

保坂智子先生は院内保育所に関する調査を発表し、保育所は古くからあるが、保育士が3名なのに利用者も3名で、もっと利用しやすくするにはどうするかなども議論されました。3歳までしか利用できず、就学時まで別な保育所に入れるのは子供にとっても親にとってもストレスで、それがネックではないかという意見がありました。院長・事務長も今後の検討を約束されました。さらに、女性医師・看護師たちにとってもっとも要望の高い、病児・病後児保育に関しては、小児科もあるし設置に向けて積極的に取り組むことになりました。

短時間正規雇用の利用促進や、復職支援にも積極的にかかわり、研修プログラムを作成し給与

の処遇を含めホームページに掲載することも方針として決定されたとのことでした。

それぞれの病院に、窓口としてメンターとなる女性医師がいると、ことがうまく進みます。病院管理者と密接に連絡しながら、解決に向けて進んでほしいものです。

こうして、「各論」が熱心に取り組まれるとおのずと実績があがると思われます。各論とは全体を構成する各項各部門に関する議論のことです。これが充実し、議論が盛り上がり実践されると、この活動も一層の進歩がみられるでしょう。11月25日（月）は仙台オープン病院を訪問して議論するのを楽しみにしております。今後いろいろな病院に行き意見交換したいものです。どうぞその節は、よろしくお願い申し上げます。



(東北労災病院にて)

